

パスモア教授講演会記事

昭和四十二年十一月九日(水)午後一時より、京都大学文学部第一講義室において、オーストラリア国立大学のジョン・パスモア教授 Prof. John Pasmore により『論理としての哲学』(Philosophy as a Theory of Discussion) という演題の下に講演が京都大学文学部主催で行なわれた。その大要は次のことである。

パスモア教授によれば、哲学は議論についての理論を中心問題とするのであり、哲学者の語ることはそれですべてだといわけてはないが、他の事柄はそれにかかわりをもつのである。哲学 philosophy という語は、ヨーロッパの歴史の諸段階において、大変相異なった多くのことを意味してきたわけである。この区別はプラトンも基本的と考えていて、しばしばその区別をしようとしている。すなわち、基本的な区別が、哲学者といわゆる賢者 sage の間に、考えられるのである。

賢者は「存在とは何か」「人生とは何か」といった重要であり興味深い事柄について発言する場合、詩人であったり、小説

家であったり、宗教的思想家であったりするが、かれらは自分の発言を合理的な議論によって支えはしない。そうすることがかれらには必要でなかったのかもしれないが、とにかくかれらはそういうことをしないのである。これに対し哲学者は、自分の言うところのことを、種々の議論と証拠によって支えようとまさに大いに努めるのである。哲学者は、単に「これがわたしの信ずるところである」とか、「これがあなたの信すべきことである」とか、言うのではない。この点で哲学者は賢者と異なるのである。ブラッドレイが宗教的思想家たとえば禅的思想家やインドの宗教的思想家と異なるのはこの点である。たとえば『現象と実在』におけるブラッドレイの最終的結論を考察してみるなら、それは禅的思想家などが多分いいそうなことに大変似ているであろう。しかし、ブラッドレイはかれの結論を、「諸関係」と「質」との注意深い論理的分析によって支えているのである。ブラッドレイは、もしかれの議論がどこかで誤っているなら、かれの著作の主張の全体が間違っているのだ、というであろう。

哲学と科学は合理的な議論を立てて討議するという点では同じである。ただ哲学のもち出す議論や証拠は自然科学 physical science のそれとは異なるのである。しかし哲学と科学は別のものであろうか。

歴史をふりかえってみれば、十七世紀の英国とフランスでは哲学と科学は同一視されていた。十八世紀のヒュームとその後では、哲学は「人間の科学」(science of man) と考えられ、

現在でいう心理学、社会学、政治学、歴史、文芸批評を含むものとなり、自然科学は狭い意味の哲学とは大変異なるものとなった。十九世紀において、心理学、社会学、政治学等々は別々の独立したものとなり十八世紀の考えは捨てられた。十九世紀においては、哲学は科学よりも偉大で荘厳な或るものである、という考えがとられ、科学は世界を記述するが、哲学は世界を説明するものとされた。

哲学というものは一つの極端から他の極端へと移る。現代の英国においては、科学が世界について真なる言明の一切をわれわれに告げ、世界の事物が何故現在あるようにあるかというのであり、これらのことは哲学の課題ではないといわれている。特にウィットゲンシュタインの後、哲学は単に分析であり、世界について何ら新しい事を言わず、何ら情報を与えないとされている。哲学のなすことのすべては明確化 elucidation なのである。

哲学のなすべきことは知識を与えることでなく、人々の言っていることを明らかにする clarity によるものであり、という見解は、大きな困難を生んだ。哲学者は科学者が真理を語る仕方以外のどんな仕方でも、より明瞭に、物事をいうるのである。化学者は生物学におけるヴィールスとは何であるかを明らかにするであろう。しかしこれは哲学者の仕事ではない。哲学者は常に、「真理」とか、「意味」とか、「説明」とかについて語る。若し哲学が端的に分析なら、哲学が分析する問題の話題 subject はこれらのごとくであり他の話題ではないのは何故か、

がわからなくなる。分析することがらが世界の事象でないなら、一体分析は何を分析するのか。

分析は何か新しいことをいうのである。哲学は何故「説明」、「意味」、「真理」にかかわり、そしてまた、どんな情報をわれわれに与えるのか。

哲学者が与える情報は、合理的な議論というものの本性に關するものである。こういうふう言うのと、最初は奇妙に思われるかもしれない。何故なら、哲学者がたとえば心身関係を論ずるとき、その哲学者はかれの議論にかかわっているのではないからである。しかし、哲学者が心身関係について語るとき、かれは生理学者のように語るのではない。デカルトは心身関係を論じて生理学者のように語ったが、それはかれがみずから生理学者でもあったし、十七世紀の哲学者であったからである。今では哲学者は、心は松果腺を通じて身体を動かすものだというふうには論じない。哲学者が論ずるのは大変異なった種類の議論である。すなわち、われわれが人間の行動を説明するのは、科学者の与えるような種類の説明、すなわち、大雑把にいうと因果的な説明、であるのか、それとも目的 purposive 説明とか意図による intentional 説明とかいわれる別の種類の説明であるのか、ということ哲学者は論ずるのである。現在、哲学において数多くの人々、たとえばアンスクーム G. E. M. Anscombe、ケニー A. Kenny 等々の人々はこうした特殊な説明を必要であるというが、他方、クワイン W. V. Quine、スマート J. J. C. Smart、またオーストラリアの哲学者達は、

そうした特殊な説明は不必要であり、科学者の与える説明だけが唯一の本当の説明だ、という。ここでは心身問題それ自体が問題ではなく、人間の行動を合理的に論ずるためには一つの全く特別な仕方でも論ずすめねばならないのか、とか、また物理学の対象の振舞を論ずる際に与えられる証拠は、生理学的な説明において与えられる証拠とは、種類において全く相異なっているのか、ということが問題である。基本的な問題は、説明の型は一種類なのかそれとも一種類以上なのか、また科学者の語る証拠は特殊なものであるのか、ということである。合理的な議論の本性についての関心が全体の中心なのである。

このことは論理学の場合最も明らかである。論理についてプラトンが、ソフィストの議論の方法のどこが悪いのか、と問うているところがある。ソフィストの議論は合理的な議論のように見えるのに混沌に終わるのである。この問題はアリストテレスに受け継がれ、アリストテレスはソフィストの方法について本を書いている。

最近三十年のうちは、論理学は数学者達によって引き受けられて来た。しかしかれらは、はっきりと数学の一部門を構成するようなものから仕事を始めたのであった。哲学者は論理をつれども、アムステルダム国際会議 (Logic, Methodology and Philosophy of Science) では、論理は純粹に数学的な議論から区別され、日常的な議論の構造をもっと綿密に論ずるようになった。論理は合理的な議論の理論なのである。

知識論または認識論は次のような問いから始まる。「私はこ

れを知っている」とか、「私はこのことを信じている」とかいて、人々が自分は知識をもっていると主張するとき、それをどうして知っているのかとわれわれが問うならば、その答えは「何故なら私はそれを経験したからである」とか、また、「私の眼でみたから」、「私は特別の洞察力をもっているから」、「それは自明であって証拠を要しないから」とかいうものである。認識論者は、「私は信ずる」という主張と、私は知っていると本当にいえる場合との、差は何であるか、を問うのである。認識論は、感覚や経験は頼りになる知識かどうかを問う。プラトンはこれらは真の知識ではなく、知覚や経験によってえられたものは大変うつろいやすいので頼りにならないといったが、経験論者達はこれと反対のことをいう。これらすべてのことは、われわれが議論をどのようにして支えるかというこのコンテキストに関わりをもっているのである。われわれの課題は、知識論を心理学者の語る仕方でも、また「これをわが眼で見た」とか、「こういう感覚所与を私はもっている」とか、「私のもっているのは最上の感覚所与だ」とか言って議論にけりをつけてしまうことでもない。われわれの問題は、「知覚は推論なのかそうでないのか」とか、「知覚がすべての知識を形成するのか」とかいったことなのである。

議論をすすめるために或る事を真理としてまたは真理であるものとして、とり出しておくのは有益な手だてである。しかし、真理というのは種類において一つなのか、それとも種々の異なった種類の真理があるのであろうか。「真理というものは

……」と一人の教師がいうとき、「真理」は意味をもっているのだとしよう。たとえば論理実証主義者のカルナップその他の人々は、「いかにしてわれわれは有意義 (meaningful) な発言と無意味な発言を区別しうるのか」という問題を論じたが、これらの人々は合理的な議論は有意義なもの (meaningful) でなくてはならぬと考えていたのである。伝統的な形而上学者も自分の理説を一つの論理によって支えており、次のように論ずるのである。すなわち、大概の議論は、それ自身真というより、より大きな体系の中への関連づけによって真となるのである、とかれらはいうのである。かれらにとって真理は全体であり、何事かを理解するには、そのものの属する体系全体を知らねばならぬのである。説明というものは、世界が何故現在あることにあるのかという最終的な説明に言及して、ないなら、充分ではないのである。従って、真理の説明は体系全体にかかわるのである。これが一元論者の考えである。しかし、他方、原子論的な形而上学を唱えるものもいる。たとえば、ラッセルがそうである。原子論的形而上学者にとっては、「真であること」は純粹に個別的な個体であり、言明の意味は純粹に個別的なものとしての感覚への関連づけで定まるのである。言明を理解することは、究極的な個体を探し求めることである。

一元論者にとっては、合理的議論は体系全体にかかわることであり、他方原子論者にとっては、真理はわれわれを究極的な個別者にまで導くのである。しかし、思うに、両者とも間違っているのである。いずれの側も、それ自体合理的に論ずること

のできないものに信頼をおいているのである。われわれはブラッドレイの絶対者やラッセルの原子的事実について何も言い得ない。両者とも合理的な議論にかかり得ないものであり、拒否されねばならない。自分が間違っているか正しいかは、合理的な議論によってのみ、すなわち、われわれが問題の意味を限定する場合、それは如何にしてなされるかを問うことよってのみ、決着をつけるのである。

倫理学や、政治や社会についての哲学は、或る人々の特に重要であり本質的なものとするところである。しかし、これらの学問の中で基本的な重要性をもった問題に関して、それらをどう扱うかという合理的な議論の本性というものは、はっきりしないように見える。ものの美醜を知るのには誰に相談すればよいかをわれわれは知っている。しかし、われわれは合理的な議論によって、たとえば一本の植木が美しいかどうかを知ることではできないように見える。好悪の問題については、ある選択に対して、或る人はそれをよしとし、また、正しい行為だというであろうし、またある人はそうでないというであろう。そうした選択が正しいか正しくないかを決める合理的な議論は存在しないように見える。しかし、或る選択は正しいとか、道徳的であるとか言う問題、そしてまた「善」とか「美」とかいう話題について論ずる、政治学、倫理学、美学といったものが哲学者にとって重要なものであるなら、それらの話題においても或る種の合理的な議論が基本的に必要であり、従ってそれら学問それぞれ全体の全体についての吟味が必要となる。

これらのことは、今まで論じて来た問題と関係がある。すなわち、哲学の中心に、合理的な議論の種々の型の分析が生ずるのである。或る型の議論は、意味を見出したり、説明をししたりするさいに非合理的であろう。

哲学は哲学以外の事についてもすべて語るべきであるのかさうでないのかというのは基本的な問題である。哲学者は道徳、政治、教育について理解のある見解を表明しうるのであろうか。

哲学者は非常に多くの事について語らねばならぬが、その際次の二つの事が大切であろう。すなわち、哲学者は合理的な議論に従事しなくてはならないこと、そして、哲学者は何に関心をもつにせよ、合理的な議論の本性について、すなわち合理的な議論の奥底にあるものについて、関心をもたねばならないのである。

(神野慧一郎記)

京都大学大学院文学研究科

博士課程単位修得者研究論文題目

(哲学科関係)

——昭和四十二年三月——

哲学専攻

遠山郁代 ホワイトヘッドの象徴的関連づけ
浅野椿英 フッサールの意味論

西洋哲学史専攻

野本和幸 区割の基準の問題

宗教学専攻

岡野昌雄 アウグスティヌスの創造論

尾崎和彦 キエルケゴールのキリスト論における問題点

——新約聖書との関連において——

基督教学専攻

原田博充 キリスト教と諸宗教との原理的關係について

心理学専攻

杉田千鶴子 認知的不協和理論に関する研究

森源三郎 シロネズミの自発的交替行動の研究

社会学専攻

中野秀一郎 比較社会構造論序説

平田順治 現代農村の社会構造

——近代集団の成立過程と存続を中心として——

美学美術史専攻

神林恒道 シェリング美学に於ける浪漫的なるもの

——シェリングとシラーの悲劇論の比較に依る

試験——